

FUJIEDA ROTARY CLUB Weekly Bulletin

例会：毎週水曜日 小杉苑 藤枝市青木2-2-48 TEL 054-641-3321
事務局：藤枝市青木1-9-16 TEL 054-647-2300 FAX 054-647-2040

会長：柳原寿男 副会長：鈴木廣利
幹事：宮川邦光 副幹事：松葉隆夫



2004-2005年度
RIテーマ

**ロータリーを
祝おう**

100年の歩み

グレンE.エステス・シニア



可睡ゆりの園にて

[写真提供：櫻井 龍太君]

第1588回

<ソング>それでごそロータリー
<ソングリーダー>岩崎 四郎君



会長挨拶

柳原 寿男君

本日は「8/15 終戦その時私は」というテーマで、江崎友次郎君、櫻井龍太君、小西啓一君のお話を伺うことになっております。終戦より59年を経た現在、御三方の感慨もひとしおかと思われれます。貴重な体験をお聞かせいただくことは、風化させないためにも大切なことと思えます。

さて、8月8日は蓮華寺池公園清掃奉仕活動を行いました。後藤社会奉仕委員長を中心に多数の会員の協力を得て、日曜日の早朝にもかかわらず頑張って参りました。大変ご苦労さまでした。

古来、「早起きは三文の徳(得)」と云われてきましたが、現在では医学的にも証明されております。

朝の光が目に入って脳を刺激すると、体内時計が作動し始め、それから15・6時間後に自然の眠りの訪れる時間がくるといわれます。睡眠障害もいろいろの型がありますが、寝つきの悪い方は、まず早起きして朝の光を浴びることです。いわゆる「早寝早起き」ではなく「早起き早寝」です。

(発想の転換)

良い睡眠をとると脳内にセロトニンという物質が放出されます。これは気分や集中力を左右すると思われる物質で、これが増えると心が落ち着いてさわやかな気分になり、集中力も高まるといわれています。座禅の瞑想中はセロトニンが増えていることが確認されています。(うつ病では減少)痛み、疲労、ストレスなどを感じにくくする働きがあって気持ちよく体を動かせるようになるそうです。最近の子供達のいわゆる「キレル」と

いう症状は、丁度逆のようです。

座禅では丹田呼吸法(息を吐く時に下腹部をギュッと絞るように呼吸する)で、周期的収縮がセロトニン量を増やすのに有効といわれています。

ウォーキングでは、ただ何気無く歩くのではなくて規則的な運動をした時、セロトニン量を増やすこととなります。歩くりズムに合わせて呼吸するウォーク呼吸法は、歩く動作と呼吸のリズムを合わせることで、足と呼吸筋の両方に意識が向くことになり、20分間のウォーク呼吸法でセロトニン量が2倍近く増加したという報告があります。最初の2歩でしっかり吐く、次の2歩で自然に鼻から空気が入ってくるような呼吸法、慣れたら息を吐く歩数を3歩4歩と増やすと息をよりしっかり吐けるので、リラックス感が高まり、プレッシャーに強く、ものに動じない性格に次第になっていくそうです。

日常生活の中に、正しい健康法を取り入れましょう。

幹事報告

宮川 邦光君

国際ロータリー第2620地区渡邊ガバナー、溝口社会奉仕委員長より「社会奉仕委員会研修会」開催のお知らせが届いております。

日時 9月19日(日)13時開始

場所 山梨県環境科学研究所

同じく渡邊ガバナー、三枝クラブ奉仕委員長、小野拡大・増強小委員長より、2003~04年度拡大・増強委員会「委員会活動報告書・CD-R版」の送付のご案内が届いております。

国際ロータリー第2620地区クラブ事務所一覽表が届いております。

藤枝市サッカー協会少年委員会より第39回藤枝市少年サッカーリーグ戦開会式への出席のお願いが届いております。

日時 9月19日(日)12時

場所 藤枝市民グランド

藤枝柔道倶楽部様より第42回藤枝市柔道祭のお礼状が届いております。

出席報告

松葉 隆夫君

本日のホームクラブ 出席者	前回の補正出席者
28 / 41 68.29%	32 / 41 78.05%

(1)欠席者(事前連絡とメーキャップをどうぞ)

青島彰君 岩田君 栗原君 小宮君
水野君 村松宏君 浅川君 板倉君
仲田晃君 鈴木舜君 村松英君 望月志君

(2)メーキャップ者

岩田 規君(藤枝南) 飯塚 秀彦君(藤枝南)
小宮 弘一郎君(藤枝南) 鈴木 舜光君(藤枝南)

スマイルBOX

松葉 隆夫君

●8月2・3日と竹田先輩と富士登山を62才にして初めて登頂し、征服感と健康に感謝しています。早速小コンペでゴルフも優勝し充実しています。

飯塚 秀彦君

●終戦時そのとき教えられたことの卓話にご指名を頂き感謝

江崎 友次郎君

●卓話者としてお礼

櫻井 龍太君

スマイル累計額 142,300円

会員卓話

『戦争が教えてくれたこと』

江崎 友次郎君



若い人は昔の話を聞くことを嫌いますが、家でも是非、じいさん、ばあさんの話は聞いてやって下さい。それも親孝行

の一つです。

終戦の年、昭和20年 私は15才で島田商業学校の4年生で、今でいえば高校1年生の年代でしたが、その年の1年半前には勤労働員として、軍需工場に動員され、飛行機の部品作りにはげんでいました。

私共の少年時代はお国のために、我が身を奉げると云う考え方が教育によって植え付けられていたので一貫して、愛国心に燃えていましたし、日本はどんな事があっても、絶対に負けることはない。神風が吹いて必ず、助けてくれると信じていました。然し日本の大本営は広島、長崎の原爆についても、爆弾投下を発表したのは、2日後、然も被害は僅少と宣伝しました。

終戦の日の数日前、新聞販売店の店主会合が静岡岡で開かれ東京日日新聞、今の毎日新聞の本社の人から日本は降伏するらしいと云う言葉を父が持ち帰りました。

その時、私は父に向かって、絶対日本は負けない。そんなことを云う者は非国民だと反発したのを今でも忘れません。

マインドコントロールされた当時の若者は全て、その様に何ら批判することもありませんでした。特に戦地に赴き、戦死された人、特に片道飛行の燃料で特攻隊として、祖国の為に散った人達の靈に心から哀悼の意を表したいと思います。

今年、3日前の8月15日静岡基地から沖縄前線に散華された海軍夜間飛行隊芙蓉隊員105名の追悼式があり参列して来ました。航空自衛隊の航空祭に行った折には、基地内にある芙蓉の碑のも是非お参りして頂きたいと思います。

終戦の日の思い出に戻りますが、8月15日重大発表があるからラジオを聞く様にと云う云い継ぎが隣組から伝えられ、ラジオの前で放送を聞く事となりました。

それが終戦の詔書としての天皇陛下の玉音放送でしたが、内容については何を云っているのか意味は解らず、もっと頑張れとも云われているとも解せられましたが、父親からは戦争は終わったんだ

と聞かされ、信じ難い思いでしたが、この先どうなるのか張り詰めた風の糸が急に切れた様な無力感に襲われました。

工場への動員も解かれましたので、次の日から学校へ通う事になりましたが、戦後の通学は交通事情が極度に悪く、汽車は1時間に1本。乗客は客室に杯れていましたので、いつもデッキにぶら下がり通学し、時には藤枝から島田まで舗装の無い砂利道を歩いて学校へ行った事もありました。まじめな学生だと学校の先生から褒められましたが、悪童共からはいじめられました。

資源不足の日本が資源豊かな海外に活路を求め、国益の為、植民地政策を推し進め、特に満州への移民を奨励し、勢いにのった軍部が政治に介入。戦端を拡大の為に米英による経済封鎖と外交の不手際から太平洋戦争に突入しました。

戦争と云う手段は大きな誤りでしたが、日本のこの行動により、植民地化されていたアジア諸国がイギリス、フランス等の植民地から開放され、独立。印度、タイ、マレーシア、ベトナム、インドネシアからは高い評判を得ている事も、プラス面として知らなければなりません。戦争は二度と起こしてはなりません、明治以降アジアに吹き荒れていた欧米から植民地政策を退け、南下して来たロシアの侵略を砕き、独立を守り通した偉大なる国として日本に誇りをもって、これからは平和を守り続けなければならないと思います。また、それでなければ、南太平洋から大陸に至る広大な戦場に散った230万の将兵が、私たちに残してくれた偉大な遺産を無駄にすることになるからです。ご静聴を感謝します。

『59年前の夏』

櫻井 龍太君



昭和18年から、父親の勤めの関係で、富山県高岡市に住んで、私は高岡中学校(旧制)に在籍して居りましたが、2年生の2学期から、“学徒動員”として、

軍需工場に通っていました。

月2回の登校日も、軍事教練で勉強どころではありませんでした。

昭和20年3月に学校を卒業したものの、特別な理由がない場合は、引き続いて工場通勤を続ける事になって居りました。

父の口ききで、4月から高岡税務署の、職員として採用になり、この時点で『税』との係りが始まったわけです。

この頃は、戦況は不利となり太平洋側は、連日のように空襲・艦砲射撃を受けて居ましたが、日本海側は、飛行機の航続距離の関係で、7月に入って福井市・富山市・長岡市が空襲により全焼し、次は高岡市の番たどの噂が専らでした。

さて、8月15日に重大放送があるとのことで、署の会議室に全員が集まり、ラジオを聞いたのですが、雑音がひどくて、何だか判らず夕方になって日本が負けたことが判明した次第です。

19才では、敗戦後がどうなるのか何の見当もつかないままに、引き続き税務署に勤務して居りました。

翌年4月に、母の郷里に引越して来ましたが、経済は闇取引が横行したものの、治安は安定して居り、日本人の国民意識の高さに今更ながら感心する次第です。

『昭和20年8月15日その時の私』



小西 啓一君

私は昭和10年12月15日生まれですから、9歳8ヶ月国民学校の4年生、当日は近くの

小川か蓮華寺池に魚とりに出かけ、帰ったら大人から日本が戦争に負けたと言われ、以前から日本が戦争に負けたら男の子は皆大切な処を取られると聞かされていたので、「これからどうなるのかな」との思いは一瞬しましたが、警戒警報も空襲警報も無い静かな日何日か続き、米軍のグラマン戦闘機の乗員が見えるほどの低空飛行をし、旋

回していても警報も無く、防空壕に隠れないで空を見上げている、「その時日本はほんとに負けたのかな」と疑問を持ちながらも思うようになった。

家族は祖父（茂左衛門 66 才）祖母（とも 60 才）父（健治 37 才）母（ふみ（36 才）弟（省二 9 才）の 6 人家族と住み込みの女中さんが 1 名。販売する商品が無く店は戸が閉めてあり、配給所（食用油・マッチ等）に指定されていた。父は徴用のせがれで、鬼岩寺近くの農産加工所に勤めていた。私は町内の公民館で町内の子供達 1 年から 6 年生まで 2 学年 1 クラスで授業をうけていた。それも夜間に空襲警報があると翌日は休みという状態が終戦まで数ヶ月続いていた。家族の間では祖父母と子供は川根町の家山へ疎開するという話しが出ていた。

子供なりにもつらかった事は、食糧難だった。屋敷の空き地は総て畑で石や瓦の破片が出てくる荒地にサツマイモや南瓜、きゅうり等を植え人肥や馬糞を肥料にして栽培したがサツマイモは水っぽく苦く、南瓜もスカスカでほとんど味などなかった。主食はサツマイモの粉で作ったすいとんや、稗、麦などだった。榎の実、椎の実、桑の実、野イチゴの実、躑躅の花の蜜、田圃の蝗（イナゴ）、タニシ、川魚等々様々な物を食べました。父の自転車の後ろに乗り農家へ物を持ち物々交換につれられて行きました。

戦時中の大変な時代に比べれば、戦後の石油ショック、今回の不況など比較にならない私たちの年代の人々はベースに戦時中の大変だった時代の思い出が有り、それとの比較で物事を考え常に「あの時に比べれば」の基準が心の中に有ると思います。

(担当/桜井富)